

日本の世代間交流の実践と成果について

1. さまざまなアプローチ

日本においても産業化が本格化する以前の時代においては大家族制度のもとで人々は生活し、世代間交流は普通のことであった。しかし高度成長期に入った 1960 年代から核家族化が進行して多世代の交流が希薄化し始め、世代間交流の重要性が徐々に指摘されるようになってきた。

世代間交流はさまざまな観点から進められてきた。例えば公共施設の複合化である。これは施設整備コストの削減という財政事情を背景とする流れであるが、幼老複合施設では世代間交流の促進というソフト面での副次効果も期待されている。公共施設の中でも「幼老複合施設」とは、保育園や児童館、小学校などの子ども用の施設と、老人ホームやデイサービスセンターなどの高齢者施設の合築・併設事例である。これは 2000 年の介護保険制度創設時にすでに約 560 の施設で生まれていた。

また例えば、全国の 1731 自治体を対象とした「学校施設と他の公共施設等との複合化に関する実態調査（文部科学省 2014 年）」によると、公立小中学校約 1 万校のうち特別養護老人ホームや老人デイサービスセンター等の高齢者施設を併設している学校は 113 校である。この数は 1996 年には 13 校であったので増加が続いている。

2. 近年の動向

日本では 2017 年には高齢化率が 27%を超える超高齢社会となっている。一方で少子化が進行し人口減少社会となっている。そのなかで、高齢者も社会保障の一方的な「受け手」としてのみ存在し続けることは社会にとっても本人にとっても好ましいことではないとの認識が広がっている。

こうして地域の資源を活かし、暮らしと地域社会に豊かさを生み出すために高齢者の活躍が大きく期待され、自身の虚弱化予防の努力とともに地域社会資源の重要な部分として高齢者の広範なボランティア活動への参加が重要となっている。

世代間交流活動は、そのことによって地域全体そして高齢者の活性化の効果も期待され、また子供の成長にとっても貴重な機会であることから、多世代交流・共生のまちづくりを目指して全国のデイサービスなど的高齢者サービスの中で、高齢者施設の中で、また地域高齢者サロン、子育て支援施設、宅幼老所（小規模で家庭的な雰囲気の中、高齢者、障害者や子どもなどに対して、1人ひとりの生活リズムに合わせて柔軟なサービスを行う）などの中でも数多くの世代間交流活動が進められている。

3. 活動事例

★その1 子供を地域で育てるシニアボランティア

「あおば学校支援ネットワーク」は、2005 年に地方自治体が主催した「学校支援ボラン

ティア・コーディネーター養成講座」の修了者有志が発足させた市民グループ。コーディネーターもボランティアも半数以上が高齢者。『子どもは学校と家庭と社会、その地域で育てるもの』『教育に地域が関わらないといけない』と考えている。

初は学校支援という形でスタートしたが、今では地域を巻き込み、「街づくりをしながらの学校支援」へと活動を広げている。

①学校の授業や校外活動への支援

教員のアシスタントとして教室に入り、計算につまずいている子へのアドバイスなど、生活支援・給食補助・学習支援などを行う。毎年4月の新1年生のクラスには、1か月集中して約50人のボランティアが入る。遠足などの校外学習への同行なども行っている。学校側も子どもたちが多様な人たちとの関わりの中で成長することを大事ととらえている。

②休日の体験活動

学校の教室を借りて実験教室や工作教室を開く。割り箸鉄砲工作は子どもたちに大人気だ。備長炭を利用した電池で電球を点けるなど、理科好きの高齢者が出前授業をすることもある。高齢者が「昔取った杵柄」を最大限発揮できる。

③地域活動

毎年開催の「お化け屋敷」は、みんなが楽しみにしている行事。小学校3年生から80歳前後までが集まり、年齢に関係なく、ニックネームで呼び合い、ワイワイと準備をする。

デイキャンプでは、ソーラークッカーやソーラーおもちゃを作って1日楽しむ。プログラムも内容もボランティアが決める。

こうした活動を通じて、高齢者ボランティアは人一倍健康管理に気を遣うようになる。先生や子どもたちに風邪をうつしてはならないし、何より活動に穴をあけてはいけないからだ。日々の体調管理が結果的に介護予防につながっている。また、自分の得意分野を発揮することで子どもたちや教師、保護者などから感謝の言葉をかけられることが何よりの喜びとなっている。

☆その2 介護施設で高齢者と子どもの世代間交流

共働きで親の帰りが遅く、夜まで一人で過ごす子どもたちを、介護施設の高齢者たちが面倒をみている。

香川県にある小規模多機能型居宅介護施設「えんざ」では、放課後の小学生の居場所として学童クラブ「きっずデイ」を開所している。毎日小学生が放課後に来て、おやつを食べ、勉強も済ませると、高齢者と一緒にテレビを見たり遊んだりして過ごす。高齢者は、子どもたちに昔の遊びを教えたり、一緒に家事をしたりして楽しむ。

現代は、ほとんどが核家族で、近所付き合いも希薄になり、高齢者と触れ合ったことがないという子どもも少なくない。このような時間を共に過ごすことによって子どもたちには高齢者を労わるという思いやりの心が芽生え、高齢者も子どもの面倒をみることに生きがいを感じるようになる。

高齢になって体が弱ってくると、お世話を受けるだけになってしまい、人の役に立たないと悲観的になってしまいがちだが、子どもとの交流を通して高齢者ならではの知恵や経験を伝える役割を持つことにより、心身ともに生き生きとしてくるようだ。

☆その3 古くて新しい住まい方

鹿児島市に2013年に開設された「NAGAYA TOWER」は、「できることは自分でしながらも、互いにさりげなく手を貸し合って暮らしていく」場として、血縁によらない「絆」を作り出すことを目指した賃貸住宅だ。現在4歳から95歳までの多世代が共に暮らしている。ここには、人と関わりながら生活することを促す、ハードとソフト両面でのさまざまな工夫がある。外観は6階建て35戸のモダンなマンション風だが、中庭側で住民同士が交流できるよう建物はV字型をしており、各居室のベランダには仕切壁がなくつながっている。1階では発達障害児のためのデイサービスが運営され、コンビニや住民参加型のカフェなどの生活利便施設がテナントとして入居している。2階には「みんなのLDK」、3階には空中庭園、4,5階には眺めの良い岩風呂と、住民共用のスペースが多く設けられている。また、3階には事情があって親と離れて里親と暮らす子どもたちの住居もある。さらにはナガヤタワーの大家さんである医師が経営する病院が隣接され、ホスピスまである。ソフト面については、生活コーディネーターが常駐し、日常生活の小さな困りごとや相談に応じるだけでなく、居住者が部屋の外に出て交流するためのイベントの企画も随時行っている。介護が必要な高齢者にはそれぞれの状況に応じて介護・医療のサポートが受けられるが、元気な高齢者は支える側にまわってもらう。学生は他の居住者の手伝いをすることで家賃の学割を受けることができる。

こうした工夫から、ナガヤタワーでは、居住者の日常的なつながりが形成されているが、その際に、子どもたちの存在が重要なものとなっている。たとえば、ナガヤの子どもをみんなで気にかけるという光景が中庭を介して生まれている。さらに、最近社会的な運動として広がりつつある「こども食堂（地域住民や自治体が主体となって無料または低料金で子どもたちに食事を提供するコミュニティの場）」が「みんなのLDK」で開かれるようになり、建物外との新たな接点も生まれ、地域の大切な拠点となってきている。

4. 世代間交流の成果と評価について

世代間交流が高齢者にとって、子どもにとってまた社会・地域にとってどのような効果をもたらすかという研究は必ずしも活発ではない。例えば下記の2001年から2011年までの10年間の研究レビューでは研究論文は10程度であった。また、「社会老年学文献データベース Dial（ダイヤ高齢社会研究財団2018年4月13日検索）では、2010年から2017年までに16件の研究論文が発表されているに過ぎない。内容も小規模なプログラムの観察に基づくものが多い。これは、多世代交流が非常に多様な形態をとっておりまた参加人数が少ないために明確なエビデンスを求めることが困難であるという事情に基づくものと考えられる。

世代間交流についての2001年から2011年までの10年間の研究レビューによると、高

高齢者が考える世代間交流の動機には「世代継承意識」「自己充足意識」「地域貢献意識」があると報告されている。このレビューの中には、「身体的接触をとまなう交流が多く行われる可能性の高い保育的ボランティアが、高齢者の生きがい対策としての有益なプログラムになる可能性があること」、また幼児の保護者からは複合施設における交流について、「他者への思いやり」、「コミュニケーションスキルの発達につながる」という意見などもみられる。また、活動を通じて幼児の日常的な発話や様子、高齢者の主観的健康度という側面から検討することで、特に幼児側には好影響があるとの報告もある。

(林谷啓美他、「高齢者と子どもの日常交流に関する現状とあり方」、『園田学園女子大学論文集』第46号(2012))

都市部在住高齢者と小中学生を対象とした多世代交流型ダイプログラムを12か月にわたって観察した亀井らの研究では、高齢者にとって全体QOLに有意な効果が認められ、うつ傾向は有意に低下していた。このプログラムからは両世代間のコミュニケーションと仲間意識による連帯を中心とした相互交流により各世代に意味ある居場所となり、特に高齢者の孤立を防ぎ、心の健康に良い効果があることが示唆されている。

(亀井智子他、「都市部多世代交流型ダイプログラム参加者の12か月間の効果に関する縦断的検証：Mixed methodsによる高齢者の心の健康と世代間交流の変化に焦点を当てて」、『老年看護学』14巻(2010)1号)

何らかの機関の中で行われる世代間交流活動のガイドラインや評価法も提案されている。

『平成21年度児童関連サービス調査研究事業「地域子育て支援拠点事業における活動評価の分析及び普及可能なガイドラインの作成に関する研究」(一般財団法人こども未来財団)』

さらに、「世代間関与の深さ」を科学的に評価するためのツール(チェックリスト)や、地域で集う高齢者と小学生を対象とした継続的世代間交流プログラムがどのように行われているか、参加者間の世代間交流を観察して評価する尺度の開発も行われている。

(東京都健康長寿医療センター研究所「社会参加と地域保健研究チーム世代間交流評価チェックリスト」、聖路加看護大学「聖路加式世代間交流観察(SIERO)インベントリー」)